

音楽を見抜く力

野上俊之

人間と音楽のかかわり

音楽は人間の歴史とともに発展してきた。音楽の起源に関して、ネットル (Nettl, B) とレヴェス (Revesz, G) は次のように諸学説を要約している。

- (1) ダーウィン派進化説
音楽が性的本能とともに発展し、交尾の呼び声であったというものの。
- (2) リズム起源説
音楽が舞踊との密接なかかわりの中から発展してきたというもの。
- (3) 労働起源説
仕事唄が音楽にとっての推進力を与えたというもの。
- (4) 模倣説
音楽が鳥の歌に対する人間の模倣の結果として生まれたというもの。
- (5) 表現起源説
音楽が情動的会話から進化してきたというもの。
- (6) 旋律的会話説
音楽が人間の会話のアクセントやイントネーションから発展したというもの。
- (7) コミュニケーション説

離れた所からメッセージを伝達するとき、叫び声あるいは呼び声の信号を使うというもの。

- (8) 原始的コミュニケーションの未分化な方法説 (ネットルによる)
うなり声、叫び声、泣き声のような音響が、文化の中で漸次的な分化と特殊化の段階を経て、音高という性質を獲得したというもの。
- (9) 音楽が家族の起源とともに発展したという見解 (ガストンによる)
原始時代の母親が子どもをなだめようとした行動の結果が、子守歌として、最古の音楽の形態の一つでありえたらろうというもの。

その起源がいずれにせよ、音響を機能的、美的意図のもとに組織化し、文化の違いの中で、さまざまなジャンルの音楽が形成されてきている。

ある音楽に対して、積極的に参加したり、消極的であったり、また、心身ともにリフレッシュしたり、生理的拒絶反応を示すこともある。パーソナリティーの違いからこのような反応が現われるのであろうが、刺激量の差は大きな要因となろう。アフリカの民族音楽よりは三味線音楽を、三味線音楽よりはドレミファの音楽を好むのは自明の理である。しかし、それぞれの音楽的価値は大差ない。ドレミファの音楽も、もと

は西洋の一族音楽にすぎず、経済侵略に付随して伝播し、普遍性を帯びてきたものであり、その音楽性だけで他の音楽文化を押し量れるものではない。音楽文化を理解するには、それぞれの型、様式を理解する必要がある。そこでは、当然、学習というものが要求され、その結果、好みの変化や拡大が生じ、他の文化について語ることも可能となる。そして、教育が、結果は伴わなくても、その方向づけとして一隅を担うのである。

音楽のつかわれ方

音楽の必要性を考えると、特に教育上重要であるということは古くからいわれている。古代ギリシアのプラトンは魂のための音楽教育として、また、古代中国では礼楽思想の中に、倫理的な意義を認めている。このような機能は、中世のキリスト教の音楽教育に受け継がれていく。我が国でも、最近まで情操教育という名目で、特定の人格形成に役立ってきたし、現在でも、創造性とか感受性豊かなということばのべールに包まれている。

音楽は他の知識がなくても、子どもから大人まで共有できる可能性が大である。例えば、人間の活動を刺激したり、抑制するのは、リズムとかテンポが重要な要素であり、年齢差とか学習には直接関係がない。また、モーツァルトのような天才児の出現は、環境による条件づけが重要であり、出生前からの音楽とのかかわり方を示唆してくれる。しかるに、ある音楽は子どもの健全なる精神の発達にとって好ましくないとか、大人のうたであるとして、よい音楽・

悪い音楽のレッテルを貼ってしまう。そして、よい音楽を強制するのであるが、それは、ある人、ある権力による偏用であり、音の暴力と化してしまう。峯陽は次のように述べている。

「人間であることをたしかめあい、証明し、保障し、展望をさし示すものとして、音楽や文化がつくられ、使われ、伝えられ、加工されてきました。……音楽はけっして飾りものでも、ぜいたくなものでもありません。人間が人間として育つこと、働くこと、生きることに欠かせない必需品です。そして、人間の尊厳にふさわしいものです。もし、障害児をのけものにするとすれば、それもほんとうの音楽とはいえません。人間を殺すことをけしかけるうたがあるとすれば、そんなものはうたではありません。」

音楽を効果的に活用するか否かは、使い方次第であるが、現代においては、受け身になりがちである。受け身ということは、啓発されることにもなり、洗脳されることにもなる。そのため、いたずらに音楽に踊らされることのないよう、その使われ方を心得ておく必要がある。

既述した教育的な使用の他に、儀式的、B.G.M. 的、商業的、医学的なものが考えられる。儀式としての音楽は、宗教的(ミサの主要部分)、軍事的(戦意高揚)、国家的(愛国心の感情づくり)、競技的(スポーツのイベント)などに取り込まれている。B.G.M. としての音楽は、目的的に聴くのではなく、単に聞こえるように意図されたものであるが、公共的な場所において人間集団のために用いたり、個人によって自由に使われるなど、広範囲に及ぶ。商業

的な側面は、金もうけの道具として音楽を使い、今日では最も利用価値の高いものである。医学的使用が心理療法として効果のあることは古くからいわれてきたが、組織的に使われるようになったのは今世紀半ば以降である。これは、人間にとって最も有益な利用法といえよう。

音楽行動

人間が音楽に接したとき、直立不動でいることほど、不自然で苦痛なことはない。そこでは、大なり小なりの反応を起こすであろう。本能的であったり、感性的、理性的に何らかの形で現わすことになる。メリアム (Merriam, A) は、人間が音楽に対して抱き、文化的事実として受け入れている概念は、楽音ならびにこれにかかわる態度や価値観の双方を支える基盤となっているが、その概念を各種の行動に翻訳しなければならないとし、四種の主要な行動に分類している。すなわち、

- (1) 身体行動 (音をつくる際の身体部分の操作、表情)
- (2) 楽音にかかわる言語行動 (上手下手、よい悪いの判断基準など幅広い言語表現)
- (3) 音をつくる側と音を聞き反応する側双方の社会的行動
- (4) 適切な音をつくり出せるようになるための学習行動 (文化は学習された行動であり、理想や価値観に見合った学習・創作過程を形成している)

の四つである。しかし、行動として現われない心の過程も重要であろう。いずれにせよ、経験できる形として存在する音楽を媒

体とし、人間同士が互いに理解する一助となる音楽行動に目を向けてみる必要がある。そして、人間の音楽行動を理解することは有用であるが、その様相、音楽の中に何を、どのように感じるかは、個々の態度、信念、偏見、環境など多岐にわたる属性として現われる。

言語行動から

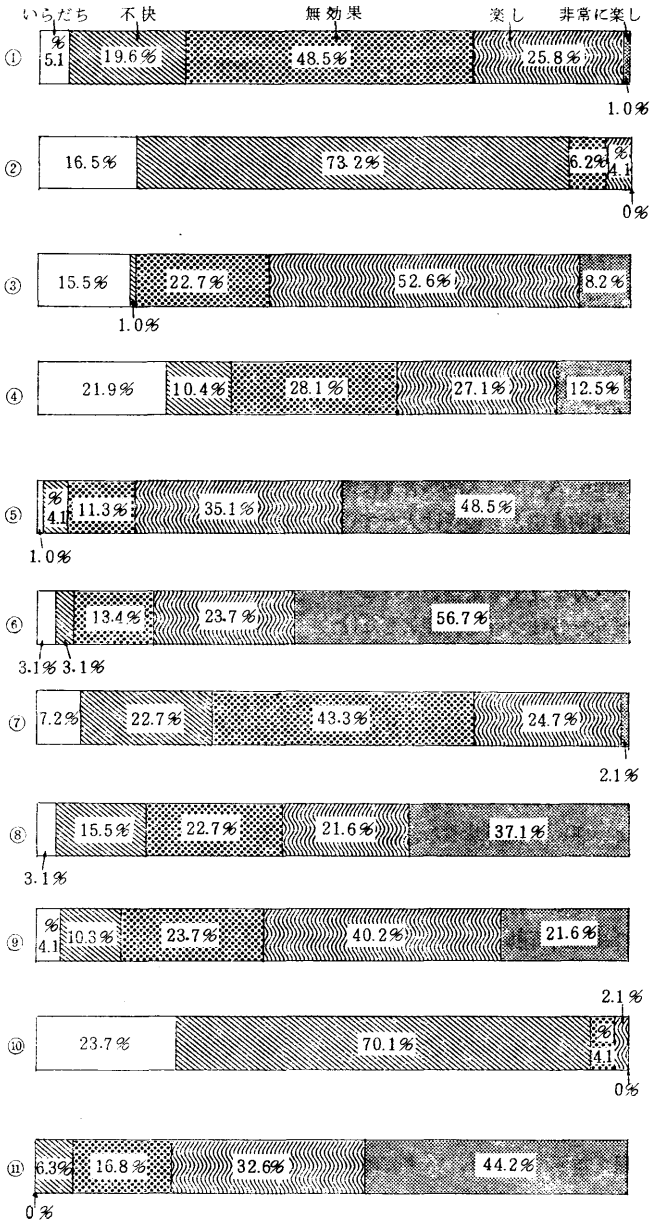
次に、幼児教育科二年次の意識調査から、音楽行動の基盤となっている、心の過程をさぐる一面としての言語行動を見てみよう。なお、この学生諸姉は、『和顔愛語』(Vol. 11 No. 2)の「音楽における基礎への展望」で紹介した、約一年半後の姿である。方法と結果の概要は以下の通りであるが、本稿では音楽をどのように判断するかについての関係分のみ扱う。

以下の音楽を聞き評価する。

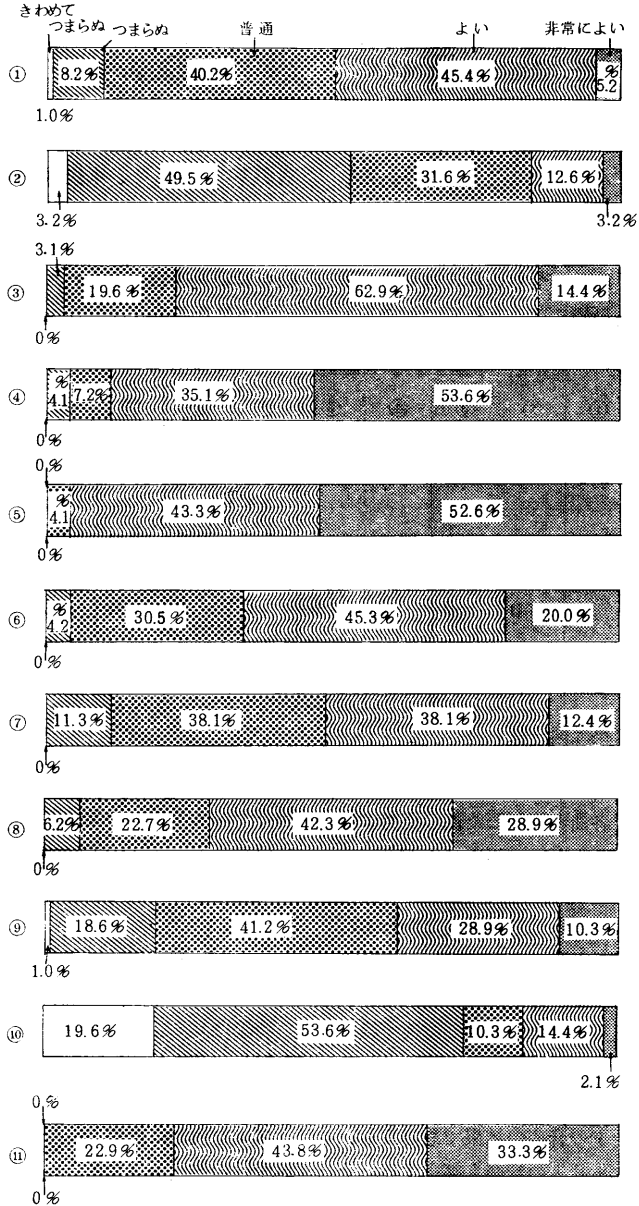
- ① ゆりかごのうた
- ② グレゴリアン・チャント
- ③ モーツァルトのピアノ・ソナタK. 545
- ④ 運命
- ⑤ イエスタディ
- ⑥ マンボ第5番
- ⑦ 早春賦
- ⑧ 季節の中で
- ⑨ めだかの兄妹
- ⑩ 君が代
- ⑪ ひとみはダイヤモンド

選曲のポイントは、社会的脈絡の中で聴取可能な様式とした。なお、今回初めて聞く曲は①と⑪が1.0%、②が87.6%、⑦が

A. 音楽に対する快楽の程度



B. Aに関係なく音楽の良し悪し



4.1%の者であり、残りの曲は既に親しい。

まず、音楽の快楽に関してであるが、⑤、⑥、⑩の曲において約8割の者が快を感じている。気分、情緒の効果に関して、⑤では、落ちつく、心がなごむ、明るい気分になる。⑥では、踊りたくなる、楽しくうきうきはずんだ気分になる。⑩は、楽しくなる、しっとりするとした者が多い。

一方、不快を感じる曲は、②、⑩で約9割。②では、暗い、落ち込む。⑩では、暗く重苦しい、憂鬱になるとしている。

一方、次に、音楽の快楽に関係なく音楽

の良し悪しについて、よい音楽は、⑤、④、⑧、⑩であり、芸術的に優位な曲が占めている。快楽の程度はそれほどでもない④が、音楽的価値が高いとされているのは興味深い。

価値のない音楽は、②、⑩であるとする者が多い。概して、不快感と同じ傾向にある。

非常によい音楽、きわめてつまらない音楽を音楽適性調査とクロスさせた結果は次のようになる。

評価	適性	曲番											%
		①	②	⑧	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	
非常によい	高	5.6	0	11.1	50.0	50.0	27.8	22.2	22.2	11.1	0	33.3	
	低	0	6.7	20.0	60.0	66.7	6.7	20.0	60.0	6.7	0	26.7	
きわまらない	高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27.8	0	
	低	0	6.7	0	0	0	0	0	0	0	6.7	0	

⑧と⑩の結果は興味深い。

以上の結果から何を讀みとるかは各自に委ねたいが、各曲を評価した側の姿勢は尊重しなければならない。例えば、⑧と⑩は正に「世代の音楽」としての観が強いといえる。③では、いらだちを覚えながらも、よい音楽であるとする者が10.3%に及ぶが、その背景はピアノの試験曲であったということにある。また、学校の授業で扱われる曲が、楽しくもないのによい音楽とする者が26.8%である。考えようによっては、「やらせ」の音楽の結果であろうし、明らかな「やらせ」の音楽も存在する。それは音楽する基本姿勢にもかかわってく

る。しかし、現実には、このような問題は退屈さやふてくされの極致であり、音楽するには事も無く、全体的に無気力状態である。

おわりに

音楽はコミュニケーションとしての機能を果しているが、不可解な非言語コミュニケーションの典型であろう。抽象的な音やリズムを内的に把握し、それを外へ表わす感受性の発達を促すことから出発しても、人間にとって、決して共通の意味は持ち得

ない。まして、音楽文化の多様化の中で、現在はテクノ音楽時代である。教育の分野では、明治初期に和洋折衷を試みているが、それとは違った視点で、子どもから大人までの葛藤の中に、新しい音楽文化を模索していかなければならない。そのような中でこそ、音楽を経験することで、自分なりの解答を得て、それが全体を見通す力として音楽行動の中に再生される必要がある

と考えられる。

参 考 文 献

- (1) A.メリアム『音楽人類学』、藤井知昭・鈴木道子訳、音楽之友社、1980.
- (2) E.ラドシー・J.ボイル『音楽行動の心理学』、徳丸吉彦・藤田芙美子・北川純子訳、音楽之友社、1985.
- (3) 峯陽『保育のための音楽入門』、青木書店、1981. (助教授)